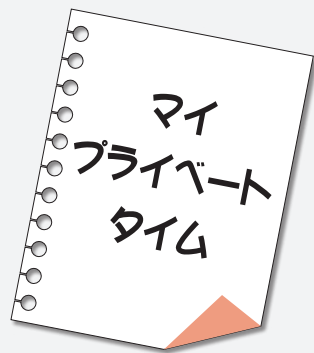


ナイ(無い)プライベートタイム

おおたけ 大竹市長(広島県) いりやま よしろう 入山欣郎
Yoshiro Iriyama



高校時代の体重に

「覚悟していたとはいえ、プライベートタイムはほとんどない」。これがこの職に就いてからの実感です。

わたしの1日は、5時30分のアラームで始まります。起きてから6時の2度目のアラームが鳴るまでは、ベッドの上で脊椎間狭窄症手術のリハビリのためのストレッチ。その後、妻が用意してくれた朝食を食べながら、「さあ今日も始まるぞ」とテレビニュースを見て、新聞を読んでいます。

8年前、家族に相談もせず突然、会社を息子と妻に任せて今の世界に飛び込んだため、妻は早くから会社に出かけていきます。妻を見送った後は洗濯物を干し、リハビリ



江戸時代から続く伝統行事「ひな流し」

第2弾の30分間の散歩に出かけます。

この職に就いてから、太ることに気を遣うようになり、1年に1キロの減量为目标に努力してきました。最初は歩くだけで一杯だった散歩も、今では20分はスロージョギングができるまでになりました。効果もあってか体重も着実に減少し、目標の8年で8キロの減量も達成できました。今は18歳のころの体重です。

散歩から戻りシャワーを浴びたら、徒歩3分の場所にある市庁舎に向かいます。始業前に副市長、教育長と情報交換や雑談をしてウォーミングアップ。その後、決裁などの定常の仕事を片付けていきます。その間も、会議や来客対応など、平日は1日を通してさまざまな公務があります。また休日も多く、行事などがあり、公務の合間のわずかな時間が自分にとっての大切なプライベートタイムになります。

ゼロからのスタート

わたしは、中学校3年生のとき、突然に父親を亡くしました。その後は母親が女手一つで私たち兄妹4人を育ててくれました。そんな母の口癖は「自立して、家族を安心できる状態にすること。まず会社を安定させ、それから初めて、人様のお世話をしなさい」でした。また、父への思いからか「信心深い人、人のお世話をよくする人は、早くに神様のもとに召されるから気を付けなさい」と



市の無形文化財に登録されている「大竹祭の奴行列」

も言っていました。そのため母は、わたしが行政の世界に挑戦することにはずっと反対していました。

わたしは30代後半から、さまざまな場面で「選挙に出て地域のために働いてほしい」という依頼を受けていました。その都度、母の反対する言葉もありましたが、「要望のほとんどに應えることのできない厳しい時代が続くだろうから、お人好しのわたしには向きません」と断り続けてきました。

しかし、60歳を前にした8年前、わたしは突然、若くもないのに血気さかんに、「まちのために尽くすことこそが、自分の生かされる道だ」と思い込み、損得で良し悪しを判断する民間の世界から、行政の世界に飛

び込みました。わたしを推してくださった方々には「あなた方のお願いを一番聞かない市長になると思いますがお許しください」と申し上げての挑戦でした。母親の反対の言葉に耳をかさなかったのは、このときだけだったと思います。

まさに、ゼロからのスタート。右も左もわからない初めての世界でわたしは、行政が物事を決断する判断基準は何だろうと考え、これまでと違う自身の新しい座標づくりのために、合間を見ては読書に没頭しました。こんなに本を読んだのは人生初めて、勉強嫌い、読書嫌いだった自分が嘘のよう。まるで人が変わったかのような感覚を覚えたものです。



亀居城址の桜と瀬戸内海の島々

笑顔 元気がやく 大竹市

わがまち大竹市は、広島県の一番西に位置する臨海工業都市ですが、眼の前に広がる瀬戸内海には世界遺産のある宮島など多くの島々が浮かび、風光明媚で気候的にも穏やかなまちです。

昨年、市制施行60周年を迎えた本市の人口は約2万8000人。多いときには約3万8000人いましたが、全国的な人口減少の流れと同様に本市でも減ってきています。

面積は広島県で一番小さく、そのほとんどが山間部です。平野部が少なく耕地面積の乏しいまちで、先人たちは知恵を絞り、埋め立てに何度も挑戦しながら、古くから漁業で生計の糧を得てきました。また、豊富で良質な小瀬川の水を活用して、江戸時代からは和紙生産が盛んになりました。洋紙が日用化した昭和期を迎え、和紙産業は衰退していききましたが、戦後は豊富な水を礎にして企業誘致を進めました。その結果、化学繊維、製紙、石油化学など多くの企業誘致に成功し、昭和30年台半ばには、日本で初めての石油コンビナートが建設されるなど、現在に至るまで工業都市として発展してきました。

現在でも市税収入の約4割は、沿岸部の大手企業からのものです。一方で、仮に大手企業が撤退すれば税収が激減するだけで

なく、関係企業を含めて多くの市民が職を失い、まちは急速に衰退してしまうという危機感をいつも抱いています。昨今の製造業界の工場再編は世界規模で展開されていますが、これまで国や県とともに工業用地や工業用水の確保、港湾整備を行ってきた結果、既存企業による新たな大きな投資も行われました。世界を相手にした競争が当たり前の産業界で、本市に立地する企業が大竹の地で存続していくために、これからも、安価な水の確保、物流コスト削減のためのインフラ整備など、行政にできることは最大限していきたいと考えています。

市民の笑顔と元気、そして大竹市が輝き続けるために。これからも挑戦は続きます。



埋め立て整備された大竹港と工場群